インド調査報告

デリーにおける日本語学習者の実態に関する予備的調査

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
ジュニア・フェロー　宮本隆史

1. 調査日程：7 月 25 日～8 月 4 日、8 月 12 日～8 月 23 日
2. 調査対象者：インド人の日本語学習者
3. 調査内容（調査方法を含む）：インタビュー調査を行った
4. 収集資料：インタビュー記録
5. 調査に基づく発表論文・口頭報告：なし

調査地としてのデリーの特徴
・近代日本の歴史に深く関わる移民・植民が行われて構成された社会としての「日系コミュニティ」は存在しない。
・日本人あるいは日系コミュニティに参加するか近い距離に位置する人々としての「日本語人」と呼びうるグループは、主に日本語の学習者として存在する。
・中短期的な日本人滞在者・家族によって構成される社会としての「日本人社会」が出現したのは、1990 年代のインドの経済自由化以後、特に 21 世紀に入ってからのことである。

以上の調査地の特徴から、日本からの滞在者や旅行者との関係の中で、日本語を学習した人々に注目することとした。デリーの日本語学習者は主にふたつのグループに分類できる。ひとつは大学や専門学校などで日本語教育を受けたグループで、もうひとつは旅行者などとの関わりの中でコミュニケーションの必要から日本語を身につけたグループである。本調査では、これらふたつのグループを対象にインタビュー調査を行なった。ただし、短期調査では定量データを得ることは困難であり、あくまでも予備的な調査に留まらざるをえないという限界はあった。

[教育機関で日本語教育を受けたグループ]
日本語教育を受けた人々としては、デリー大学で日本語を学んだ人々へのインタビューを行なった。

名前	性別	生年	学位	日本語を学習してからの期間	調査時の職業
KU	男性	1984	Advanced Diploma	6年	日系企業の通訳
VT	男性	1988	修士	7年	日系企業の通訳
DK	男性	1986	修士	6年	日系企業の通訳
DT	男性	1990	学士	3年	日系企業の通訳
KD	女性	1981	修士	6年	日系企業の通訳
JP	男性	1974	修士	5年	博士課程（日本研究）

このグループの人々が日本語を習得する誘因は、企業（特に日系企業や日系と現地の合弁会社）で働くためのスキルを身につけるというものであることが多い。インタビューをした中では、研究者を目指すJP氏以外は、日本語学習の通訳のスキルを身につけることを当初からの目的として挙げていた。

通訳者の職にある人は、いくつかの会社を渡り歩いていることが多く、インタビューをした通訳者はいずれもIT関連会社と自動車会社で勤務した経験があった。仕事の内容としては、IT 関連会社の場合は翻訳（取扱説明書や技術文書など）が多く、自動車会社では通訳（駐在員と従業員の間の通訳）が多いという傾向がある。

通訳の仕事の場合は、ヒンディー語、英語、日本語が使われることが多い。日本語の理解だけでなく日本人の感情のパターンを理解することが重要であると感じている通訳者が多いという（VT)。会社の種類ごとの特徴としては、自動車会社では生産ラインを止めないことが最重要課題であり、通訳の仕事も社内でのコミュニケーションが主となるため、敬語や謙譲語を使う必要がないという認識がある。他方で、IT 関連会社は、顧客相手のサービス業であるため、敬語・謙譲語の重要性が高いと認識されている（KU)。

こうした仕事のためには、それぞれの会社に専門用語が多くあるため経験が重要であるということが強調されていた。こうした知識は、文学の学習を中心とした、大学での学習では身につきにくいという意見が多かった。また、自動車会社ではITや機械を含め、様々な知識がつくため、最初に一時的に働くには良い就職先だとする人が複数いた（KU、VT、DK、DT)。

一方で、就職に関する情報交換のために、大学の教員や卒業生どうしのつながりが重視されている。企業も大学キャンパスでの採用活動を積極的に行なっている。このグループの人的なネットワークにおいて、大学の日本語教育の場が重要なノードになっているものと推測される。

[旅行者などとの関わりの中で日本語を身につけたグループ]

このグループは、正規の日本語教育課程などで学んだわけではなく、日本からの旅行者との関わりの中で、はなしことばとして日本語を身につけたグループである。デリーのラージーブ・チョウク、カロールバーグ、パハールガンジの 3 ヶ所でそれぞれ数度にわたり

インタビューをして回った。

名前	性別	生年	インタビューの場所	調査時の職業
JT	男性	1970	ラージーブ・チョウク	土産物店員
JS	男性	1983	ラージーブ・チョウク	ツアーガイド
GK	男性	1974	ラージーブ・チョウク	不明確
MJ	男性	1980	カロールバーグ	ツアーガイド
NC	男性	1986	カロールバーグ	ツアーガイド
PS	男性	1981	カロールバーグ	旅行会社員
KC	男性	1978	カロールバーグ	ジュース店員
MJ	男性	1973	パハールガンジ	リキシャ運転手
BH	男性	1968	パハールガンジ	土産物店員
JB	男性	1989	パハールガンジ	ホテル従業員
BE	男性	1965	パハールガンジ	飲食店員
LB	男性	1982	パハールガンジ	不明確

このグループの人々は、ひらがなをかろうじて読むことができる人物（PS）がひとりいたのみで、基本的に日本語の読み書きはできなかった。いずれも、旅行者との意思疎通をはかるうちに、徐々に日本語の会話能力を身につけた人々であった。

「日本語で話したら（日本人旅行者が）安心する」（NC）、「日本人は英語が話せないひとたくさんだから、（自分が）日本語で話すとビジネス（に）なる」（BH）といった認識が広くみられる。商売のために有利であるから、交渉をしているうちに日本語能力が身についた人が多いようである。また、「日本語話せると（日本人の）彼女できる」（JB）といった声もあり、異性の旅行者との関係をつくるのに有利という認識も散見された。

1990 年代までは、バックパッカー向けの宿泊施設が多いパハールガンジでは、数週間ほどの比較的長期で滞在する旅行者もおり、「一日中いっしょにいる」ことで日本語を学んだというケースも多かったという証言もあった（BE）。しかし、2000 年代に入ってからは、短期滞在者が多くなり、かつてのように一人の旅行者とゆっくり交流することで学ぶ機会は減少しているとのことである。

[まとめ]

デリーで日本語が人々を紐帯しているといえる場は、日系企業および教育機関の周辺と、日本人旅行者と旅行者相手の仕事をする人々の間に主として見られる。しかし、移民・植民の結果としての日系コミュニティは存在せず、企業の駐在員のような人々からなる「日本人社会」が大きくなってきたのもごく最近（10 年ほど）のことである。そのため、日本語が人々を紐帯しうる場は、今のところ中短期の日本人滞在者と現地コミュニティの接触する領域に限られると考えられる。ただし、1990 年代よりインドは経済的に成長傾向が続いており、一方で日本からインドに渡ってビジネスを展開する若い個人も増えているため、今後新たな展開を見ることができる可能性はある。